

# エコたま



# グリーン NEWS

多摩市民環境会議機関紙 第100号(通巻第160号)  
2013年5月23日発行 発行人:清水武志朗 編集人:  
井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山 3-9 東永山  
複合施設 301 tel&fax042-376-4572(事務局員は常  
駐していません) e-mail qqh43tdd@train.ocn.ne.jp  
URL http://ecomeetingtama.blog.ocn.ne.jp

## 東京消防庁／多摩市が合同で水防訓練実施



一ノ宮公園の河川敷が赤い車両で埋まった

台風や集中豪雨が多発する季節の到来を前に、東京消防庁と多摩市(水防管理団体)、ならびに各種関係団体が有機的に連携した訓練を実施することで、水害への対応能力を強化しようという大規模な訓練が、5月19日午前、多摩川の当市側河川敷の一ノ宮公園で行われた。

これは、近年の都市型水害の増加を踏まえた水防訓練ということで、地区の住民も直接参加し、地域防災力の向上を事前に図っておくことに意味がある。

訓練には東京消防庁職員 456名を始め、多摩市消防団員、市役所職員、3地区町会員など合計 28 機関、約 859 名が参加し、実践的な水防工法や住民参加の都市型水防工法を実施するとともに、消防ヘリコプター、救助工作車、消防重機、高踏破偵察車などによるダイナミックな救助活動が本番さながらに展開された。



家族連れで来た子が放水を喜ぶ

の各地で道路が冠水、家屋への浸水も始まったため、住民は自主的に各種浸水防止行動を行うものの、多摩川が増水して避難判断水位に達したため、多摩市長は避難勧告を行う。消防隊および関係機関などは、越水危険の発生した多摩



ちょっと空までお散歩に

参加車両は、消防車両が 58 台、消防ヘリコプターが4機、その他 27 台など、ヘリを含めて 89 台で、壮観そのもの。

訓練の想定では、台風の影響で活発化した前線にとも

なう集中豪雨により、多摩市内の各地で道路が冠水、家屋への浸水も始まったため、住民は自主的に各種浸水防止行動を行うものの、多摩川が増水して避難判断水位に達したため、多摩市長は避難勧告を行う。消防隊および関係機関などは、越水危険の発生した多摩川で各種水防工法を実施するとともに、消防ヘリコプター複数機により、土砂崩れによる倒壊家屋や河川の増水により中洲などに取り残された多数の要救助者を救助する、というもの。

とはいえ、公園内ではそうした迫真の訓練とは別に、はしご車体験乗車(はしご車のかごに乗って空中遊覧)、実際の消防車の放水ノズルを使った放水体験など、子どもたちの喜びそうなプログラムも用意され、その一角はのどかで笑顔の時間が流れていた。

また、渋谷区幡が谷にある消防学校から350人の生徒が見学を訪れるなど、ふだんの多摩川べりでは見られない光景も見られた。

訓練後、同庁の北村吉男消防総監は「水災に立ち向かうには、消防のみならず、行政を始め地元住民の方の協力が必要。(訓練で)心構えや備えを一層強固なものにできた」と話していた。

## 恵泉女学園の学生さんが“地域の現状”見学

恵泉女学園大学の西川正特任准教授と生徒たち6名が、5月11日、「コミュニティ・サービス・ラーニング(CSL)」という科目の授業の一環で、さえずりの森の作業日に同森を訪れた。CSLは学生たちが市民活動・ボランティア活動などの現場に一定期間通い、市民とともに活動を行い、その活動をふりかえり、レポートし、発表することで単位が与えられるという科目。



引率の西川先生と学生たち

市民に溶け込んで、ともに作業を行うなかで、地域の課題とその解決のありよう、市民としての自分のありようなどについて、市民から学ぶというもの。準備授業のなかで各地を訪れ、地域の課題を学ぶとともに、自分がこの先どの団体に参加するかを決める。

同森にはすでに2年生の岸園さん、市川さんが作業日に訪れており、そのうちの一人は夜のミーティングにまで顔を出してくれるほど。最近ではヘルメット姿もしっかり板についている。こういう先輩の存在を知れば、今回の学生たちも刺激を受けるに違いない。では、参加した学生たちの感想はどうだったのか。

まだ訪問先1件目なのに、この団体さんに参加したいと思った。私が行楽目的で行った秩父の問題と共通点があり、興味と関心が湧いた(Fさん)／都心から電車で40分ほどの所にとってもきれいな雑木林がありおどろいた。その雑木林の自然を守るために、多くの苦労があり、非常に難しくていへんな問題だと感じた。自分が住んでいる近くにこんな自然が残されていた(Wさん)／実際に足を運んで自分の目で見て、何かを感じるということは、すごく大切な活動だと今回、一番に感じた。永山の雑木林と関わりを持つことによって、多摩ニュータウンの今後の問題点は人ごとではないと思うようになった(Uさん)／(案内の)浅井さんから木のことや花のこと、どうしてこの場所にこの花が植わっているかなど話を聞いて、すごくこの森林を把握している人だなと思った(Aさん) (→すでに参加の二人:江川さん撮影)



## 今日も明日も粋曜日

### 多摩市民「発電所」第一号機完成

桃井 和馬(フォトジャーナリスト、多摩エネ協理事長)



筆者の桃井和馬氏

2年前の「3.11」が、多くの方の生き方を変えたことはまちがいない。福島県で発生した原発事故は、いまも収束する当てがないまま、放射線に汚染された廃液を流し続けている。一度事故を起こせば、想像を超えるおカネが必要になるのが原発だから、原発でつくられていた電力は、決して「安い」ものではなかったのだ。

こうした事実を前に、多摩で様々な活動を続けていた市民が手をつないだ。その結果、つくられたのが一般社団法人「多摩市循環型エネルギー協議会(エネ協)」と「多摩電力合同会社(多摩電)」という会社。

エネ協は自然エネルギーを基軸に、様々なプロジェクトを市民レベルで考える組織。「つぎの世代にどのような社会を残したいのか?」「どうしたら、自然と人間は共存していけるのか?」など、月1回開催する「エネルギー・カフェ(エネカフェ)」で話し合っている。そして、そのなかから生まれたのが専門集団「多摩電」という会社だ。

市民活動には「志」はあるが、恒常的に発電事業を継続することはできない。一方、利益を追求するだけの会社組織では、これまでの社会システムを変えることはできない。しかし、異なる資質を持つふたつの組織が一定距離のなかで協力すれば、おもしろい化学反応が起きるかもしれないと考えた。

参加者に共通するのは、まっとうな社会を次世代に伝えたいという思い。原発に代わるエネルギーを社会に普及させたいとの願いだ。プロジェクトの第一号機が、多摩市南野にある恵泉女学園大学の校舎屋上に設置された。発電規模は一般家庭の屋根につけられた太陽光パネル換算で8~9軒分。その資金はすべて、志を持つ市民が持ち寄り、大学が屋根を提供することで協働が成立した。

政府が「再生可能エネルギー固定価格買い取り制度(FIT)」をスタートさせたのが、昨年7月だった。太陽光発電などでつくられた電気を、比較的高い料金で買い取ってくれる制度だ。

けれどもこの制度には危うさもある。その一例が「儲かる」と考えた都会に本社を置く大企業が、争うように田舎の土地を取得し、太陽光パネルを張り続けていること。太陽光パネルはメンテナンスも比較的手間がかからず、地元経済にはほとんど貢献しない。つまり東京の会社が地方で太陽光パネルを設置しても、収入はほぼすべて東京で決済されるだけで、地域経済の活性化にはほとんど寄与しないのだ。

もうひとつの問題は、いくら地方で発電しても、人は身近で見ることができず、しょせん他人ごとになってしまうことだろう。



東京屋上に運ばれる資材を見守る

そんなことからエネ協がこだわったのは、発電事業を地方に任せるのではなく、消費地である首都圏で行うこと。太陽光発電の実現。それらを通し

て「電力」を考える機会の提供と、プロジェクトを通して「人と人が出会う」コミュニティづくり。

市民が始めた太陽光発電事業は、電力をつくるたんなる「パネル設置事業」ではなく、「地域共同体」と「自然エネルギー」を考えるためのひとつのツールだったのだ。

(筆者がASA桜ヶ丘東部の「せいせきNo.1」に寄稿した文章を筆者の了解を得て掲載させていただきました。

同協議会のホームページ <http://tama-enekyo.org>)



空気抵抗を増やさぬようパネルの迎角は5度と低い

### ガーデンシティ子どもまつり

2013

毎年、5月の大型連休の目玉となっている表記イベントが多摩センターのパルテノン大通りを中心に、今年も5月3~5日にかけて開催された。とにかく、通りの両側にはテントの出店や販売 人出でご



ったがえす中央通り

車両などがずらりと並び、さらに多摩中央公園、パルテノンの建物内部、グリーンライブセンターでも催しがあり、おまつりの面積としてはかなり広範囲。

また、本市と提携している長野県富士見町からの出店もあり、現地産の新鮮な野菜やジュースなどを売っていた。



今年も中央公園の大池ではカヌーの体験試漕があり、親子連れが長い列をつくって、乗る順番を待っていた。子どもたちを相手にAED教室

中央の四つ角付近では国士舘大学の学生たちが「AED教室」を開き、子どもたちに心臓マッサージの方法などを教えていた。子どもたちも半分遊びの心で「人命救助」の方法を学んでいたが、こういう試みは飲料や焼きそばなどの販売などと違った一種の社会貢献で◎。(→ベネッセを越えろ!)



### 多摩川おさかなポスト カメの引き取りやめる

5月9日付けの日本経済新聞によると、多摩川の生態系を守ろうと外来種の魚などを引き取っている川崎市多摩区の「おさかなポスト」を管理するNPOが、持ち込まれるカメが増えすぎたとして、引き取りを中止したという。現在約 250 匹を預かっており、対応に苦慮しているとのことだ。

大半はミドリガメと呼ばれるミシシippアカミミガメ。ペット店などで販売されているが、買ったお客が飼いきれなくて川などに捨て、それが生態系を破壊するとして駆除の必要性が高まっている。NPOおさかなポストの会では引き取って学校などに飼育を依頼していたが、持ち込まれるペースに追いついていけず、4月中旬に引き取りを中止したという。(→子どもはカメが大好き)

